

經濟地理學の科學的基礎付への試圖

——川西正鑑著『經濟地理學原理』及び黒正巖著

『日本經濟地理學』を讀みて——

高 橋 次 郎

一、緒 言

Statesman's Year Book には今日尙ほ七十有餘の獨立國の記載があるが、併し事實上その凡てが獨立性を有する譯ではない。歐州大戰後の世界の政治的實在は國民的國家ではなく、幾つかの國民的國家の合成せる『經濟群』である。その各群は、各々大なる金融資本國家によつて支配せられ、その中には若干の小國家又は植民地を包含して居る。輓近、經濟界に於いて企業がコンツェルン化せられて偉大なる競争力・獨占力を發揮しつつ、あると同一の傾向が諸國家の間に見出される様になり、今日の世界の政治的實在は『經濟群』であつて法律上

各箇獨立の國家ではない。此の傾向は、帝國主義の不可避的結果の一である。此の『經濟群』は、各々經濟的自立を目的とするが故に、(A)凡ての不可缺なる原料の充分なる供給——石油・鐵・石炭・銅・ゴム・小麥・綿等、(B)その生産物のための販賣市場並びにその資本輸出をなし得る未開發地方、(C)従つて又それらの原料及び製品の運輸に必須なる交通路を、直接間接に自己管理の下に置く事を目指して居る。而して、國際問題の本質が強く帝國主義に依存する關係上、國際的諸問題の多くは必然的に經濟地理的問題とならざるを得ない。それ故に、吾々は現代の經濟社會の本質の理解を必要とすると共に、又その事から離れて此の社會に於ける經濟現象の地理的分布状態をも研究するの必要に迫られて居る。斯様にして、近代人は、最も鋭敏なる關心をば經濟地理學的研究の中に見出さざるを得ない様な時代に生活しつゝあるのである。然程左様に重要な意義を有する『經濟地理學』の研究も今尙ほ極めて幼稚なる域を脱せず、未だに斯學の研究對象・方法及び課題を明確ならしめて居ない様な一般的情勢にあるのは遺憾なことであるが、最近に至つては斯學をば科學的に基礎付けんとする試圖が内外に擡頭しつゝある。

我國に於いても最近經濟地理學界は幾多の收穫を齎したが、その中今年に入つてから出版せられた左の二書に就いて、私はその讀後感を述べようと思ふ。

川西正鑑著『經濟地理學原理』(昭和六年一月、丁酉出版社發行、六六四頁、定價四圓五十錢)

黒正 嚴著『日本經濟地理學』第一分冊(昭和六年三月、岩波書店發行、一五一頁、定價一圓)

二、經濟地理學の歴史的生成の概觀

此の二つの著作を讀んで著しく感ずる事は、科學としての經濟地理學の基礎付への努力が大いになされて居ることである。此の學的基礎付の問題を正しく理解し正當なる批判をなさんがためには、吾々は豫め經濟地理學の歴史的生成の姿を概觀的に描き出して置くの必要を感ずる。(主として、B. Dietrich, Grundzüge der allgemeinen Wirtschaftsgeographie に據る。)

『經濟地理學』Wirtschaftsgeographie なる命名は一八八〇年代に始まるが、古代から經濟地理學的論述を有して居る。

古代の地理學は Aristoteles (384—322 B. C.) 以來ギリシヤに育れたが、物語的な地誌的記述が多かつた。人文地理學は此の地誌的地理學 (Chorologie) から發達し、物産地理學も亦その一部として論述せられて居た。物産の地理的分布に就いての説明は既にギリシヤ、ローマ時代の地理書に散見する所であるが、九世紀十世紀頃のアラビヤ人 (Yakt, Ibn Khordadbeh) は一層精密に物産の地理的分布や貿易路の問題を取扱つた。

中世に入つてからは、十字軍による交通の擴大及び十五世紀に於ける海上の諸發見等によつて東西の往來が頻繁となつて來たにも拘らず、Marco Polo の「東方見聞記」の外には注目すべき地理的文獻なく、十九世紀に至るまで地理學は特筆すべき發達を見なかつた。

然るに Alexander von Humboldt (1769—1857) 及び Carl Ritter (1779—1859) 出づるに及んで人文地理學は飛躍的發展を見たが、尙ほ彼等にあつては自然が凡てを意味し自然は汎ゆる人事現象の原因であるとなし、人間と自然との間の交互作用を認識する所まで至つて居なかつた。蓋し、當時は自然科學的思考が優位を占め、自然地理學のみならず人文地理學及び地誌 *Länderkunde* をも支配して居たのであるから、それも無理からぬことであると云はなければならぬ。

一方、フムボルト及びリッターの思想を巧みに攝取すると共に、他方當時の自然地理學の泰斗たる Ferdinand von Richthofen に刺戟せられて、人文地理學をして科學的獨立性を把握せしめたものは Ferdinand Ratzel (1884—1904) である。彼は人間は自然の影響を受けつゝ然かも又自然に働きかけるといふ所謂『地人相關論』の研究を以つて人文地理學の任務となし、地理學上特筆すべき貢獻をなした。彼以後の人文地理學者にしてラツツエルの影響をうけない者は殆んど無い様な状態にある。

斯くの如く地理學者がその人文地理學的研究の中に於いて經濟地理學的思考をなしつゝあつた當時、經濟學者の側に於いても經濟の地理的基礎を問題として居た。Adam Smith (1723—1790) は土地をば財貨生産の基礎と觀たが、併し國富は勞働によつて生ずるものであると説く。彼の名著 *Wealth of Nations* の各章は實に豊富なる地理的事實の觀察を以つて充されて居るが、それは普遍妥當的な經濟原則の説明のために用ひられ、地理的に分布せられた諸々の經濟現象を地理學的に系統的に取扱つたものではなかつた。

獨逸のローマン派經濟學者 Adam Heinrich Müller (1779-1829) は、地理的位置・地表の廣さ・及び地表上の天惠物を、その内部的關係に於いて、又その現在及び將來に對する意義に於いて、把握し、以つてこれを經濟生活の原則に關聯せしめんとした最初の經濟學者であると謂はれて居る。自然は靜止せるものではなく可變的なものであるとの彼の考へは、百年後の今日の經濟地理學的考察の中心をなして居るものである。

演繹法を用ひた古典學派を攻撃して、歸納法を用ふ可き事を主張し、多くの資料を蒐集して細密に事實を研究した所の歴史學派の諸學者は皆經濟の自然的基礎を論じ、且つ自然の影響を重視した。彼等の著作は極めて多くの地理的説明によつて充滿せられて居るのを見るが、歴史的比較研究方法を補ふに系統ある地理學的研究方法を以つてせず、徒らに廣汎なる資料蒐集のみに専心し、従つて理論經濟學の方面に於いても經濟地理學の分野に於いても、芳しき實を結ぶところがなかつたのである。

斯くの如く、地理學者も經濟學者も斷片的に經濟地理學的問題を論じて來たが、それに對して系統的考察を下した人は殆んどなかつた。ハンザ同盟の諸都市やフランクフルト・アム・マインに Kaufmannschule (商人學校) が出來、そこで實用的な學科の一として Kaufmannsgeographie (商人地理) なる名稱の下に商品の需給や交通路などを教えて居たが、やがて之をドイツでは Handelsgeographie (商業地理) と改稱し、それが十八世紀末に英國に傳はつて獨特の發達をなし、後には商業のみならず農業・水産業及び工業をも取扱ひ、その名は Commercial Geography (商業地理) でもその實體は Industrial Geography (産業地理) 又は Economic Geography (經

濟地理)に變形して居るものが多い。

扱て、『經濟地理學』なる名稱を初めて用ひたのはドイツの Wilhelm Götz (1844—1911) であつて、彼は一八二二年伯林地理學協會雜誌に『經濟的地理學の課題』 Die Aufgaben der wirtschaftlichen Geographie なる論文を發表し、地産及び商品の流動に直接の影響を及ぼすものとしての地表、並びに地産・商品の流動が地表に及ぼす作用を論究するを以つて經濟地理學の課題なりとなした。後、Hettner が Wirtschaftsgeographie (經濟地理學)の方がより適切であると稱えてから、一般に此の命名が用ひられて居る。その後、斯學は人文地理學の發達に刺戟せられて成長して來たが、世界大戰前まではその内容も充實せず、その科學的基礎付も發展しなかつた。

戰時及び戰後、各國の經濟鬭争が激烈となるに伴れて、實際的必要は經濟地理學の發達を著しく促進せしめた。英には G. Chisholm, L. W. Lyde, 米には J. R. Smith, E. Huntington, R. H. Whitbeck 等の學者が居るが、何れも皆理論よりも實用に重きを置いて居る。今日、經濟地理學研究の中心はドイツに在る。其處でも戰前には K. Andree, M. Eckert, E. Friedrich 等の代表的學者は何れも物産地理・産業地理・又は各地の經濟事情誌の集録程度のもを取扱つて居たに過ぎなかつたが、戰後には K. Sapper, S. Passarge, R. Reinhard, R. Lütgens, B. Dietrich 等が輩出して斯學の内容を改善し、地球空間と經濟人との間の交互作用を問題とするに至つた。

デイトリツヒは述べて曰く、『經濟地理學とは地球空間と經濟人との間の交互作用の理論であり、従つて又此の交互作用の結果として生ずる所の地球の經濟的空間の構成をばその複合・成立及び配置に於いて論究する學

問である。』(Bruno Dietrich, Grundzüge der allgemeinen Wirtschaftsgeographie, Berlin, 1928, S. 7.) その間に交互作用の行はれてゐる自然と經濟人とは對等の地位にあり、何れを主とし何れを従とすべきでもない。自然、即ち『地球の物理的特徴は人間にとつては或る與へられたものであり、人間の力添なしに發生せるものである。それは謂はば人間がその中に入り込んで居る所の空間である。人間は此の空間に居住し生活し増殖しそれに密着して居る。自然(原始的環境、原始景觀)と人間とは二個の異別なる本質ではない。それらのものは決して相互に孤立せる定在形式ではなくして、それらのものは往々弛く、又往々緊く幾千の絲を以つて結合せられて居る。此の兩者が如何に相互に結合し合ひ影響し合ふかは全く相互の力の結果によるものである。兩者は交互作用に於いて影響し、變化して行く。』(ibid., S. 30.) 次に問題となる所の『經濟人は、時間的にも空間的にも極めて變化し易い要素である。是の事は文化水準の中に深く根ざして居る。内面的文化向上又は外面的文化同化による文化水準の如何なる變化も、文化欲望及び文化能力の要素を變化せしめる。それは、無限に起る事である。……新しい經濟作用は文化水準のヨリ一層の向上に對する刺戟であり衝動である。永遠に交互作用を行ふ所の動と反動とは、文化水準を向上させ、自然景觀を變化させ、經濟作用の種類・數量及び分布を増加せしめる。』(ibid., S. 33.) 嚴密に言ふと、自然と人間との交互作用は、文化及び經濟活動の端初にのみ存し、環境の變化した瞬間に原始環境の自然力の代りに經濟人の極印の附着した新らしいものが生ずる。然らば、此の發展せる地人相關論は如何なる時期に對しても妥當するか? 否。自然と經濟人と丈けでは經濟地理學的現象は發生せず、此

の場合有力なる要素は現代と言ふ『時』であるが故に、此の關係の中に『時』Temporitätの要素を取入れる必要がある。さうすると、上述の關係は次の式を以つて表される事となる。(ibid., S. 35)

$$U+KI=WIM \cdot FK \cdot t$$

(Urlandschaft + Kulturlandschaft = wirtschaftender Mensch × Funktion des Kultur-niveaus × Temporität)

(原始景觀 + 文化景觀 = 經濟人 × 文化水準 × 時)

斯くの如き思考の下に動くデートリツヒは、その一般經濟地理學をば

- (1) 環境論 Milieulehre
- (2) 地帯論 Zonenlehre

に分け、(1)に於いては、經濟の自然的及び人間的基礎、及び自然と經濟人との間の交互作用を論じ、(2)に於いては經濟人の、及び生産・商業及び消費と言ふ形態に於ける經濟活動の、分布を研究する。(ibid., S. 37) 我國の最近の經濟地理學的勞作の多くは、此のデートリツヒの影響を何等かの仕方、に於いて受けて居るもの、の如く見える。

尙ほ此の外に實用を尙ぶアメリカやイギリスには Business Geography (實業地理) が存在し、獨逸には Kjellen (瑞典の學者) の創始せる『政治的世界現象の地理的觀察』をなす所の『風土政治學』Geopolitik 及び Arthur Dix 一派の經濟的世界現象の地理的觀察』を任務とする『風土經濟學』Geo-ökonomie があり、更に又イギリスには

特異なる存在として J. F. Horrabin のあることをも附加えて置かなければならない。

三、川西氏の所説の紹介

斯かる秋に際會して、『經濟地理學は囚はれた』と絶叫し、『放たれたる經濟學』を建設せんとして立つたのが、吾が川西正鑑氏である。

誠に氏の言ふが如く、『雨後の筍の如く簇出』せる論文述作は何れも『余りに地理學と言ふ名稱、嚴密にいへば『氣候』『土地』その他の『自然状態』に、或は又『工業』『商業』と言ふが如き産業に、乃至は『棉花』『ゴム』『砂糖』といふが如き商品の名に囚はれ、而も何等かくなさざるべからざる理由を解明せずして唯徒らに羅列して居るのみである。これ等種々なる要素を、その内面的聯關に於いて理解することが出來ず、又それ等の中に於いて——多分歴史的發展段階と共に變化するであらう所の——特に支配的な要素を見出さなければならぬといふことを知らない。』斯かる『何でも主義』『羅列主義』の結果は混沌以外の何物でもない。此の混沌界から脱出して獨立の科學としての經濟地理學を樹立せんとするに當つては多くの困難に當面するが、此の際最も注意すべきはヘーゲルの言ふが如く『自然は餘りに高く評價せられてもならぬし、又餘りに低く評價せられてもならぬ』と言ふ事である。『今日の經濟地理學は半身不隨である。即ち地理學者は自然的諸條件、嚴密にいへば氣候、地理的位置及び土地の態様を以て、その社會の性質を決定する諸因素だとなし、所謂經濟

的労働過程の一契機に過ぎぬ自然作用を餘りに高く評價し、且つ労働過程の他の二契機たる労働力、労働對象から全然切り離して居る。』

そこで、『放れたる經濟地理學を建設せん』とする『學問探究の熱情に燃え』る著者川西氏は、『先年文部省より英獨に留學するの機會を得、先學の跡を尋ね、最近ドイツ斯學の傾向に従ひ、經濟地理學を以て、經濟空間と現經濟人との交互作用を研究するものなりとなし、而も自然は労働過程（労働力、労働手段、労働對象）を媒介とすることによつてのみ始めて人間の經濟生活に作用するものであり、且つ此の三契機は互に協働するものなるが故に、私（川西氏）はこゝに如上經濟地理學の三要素を労働過程の三契機に還元し、(一)自然的基礎の内容をなす原始環象、文化（社會）環象は労働手段、(二)現經濟人は労働力、(三)兩者の交互作用は労働對象の表現形態であると見た。これに依つて少くとも従來よりも、より眞實なる經濟地理學的意味を把握され得ると信ずる』（自序四―五頁）ものである。

『第一編、理論的科學としての經濟地理學』に於いては、『經濟地理學の名稱及びその發達』『經濟地理學の對象』『經濟地理學の任務』『經濟地理學の方法論』『地理學に於ける經濟地理學の位置』『經濟地理學の領域』なる問題を取扱ひ、斯學の科學的基礎付を試みて居る。

氏も亦主としてデイトリツヒに従つて斯學の歴史的發展を概觀したる後、『經濟學者としてのハインリツヒ・

クノー Heinrich Cunow. ホンジュン J. F. Horrabin. カール・オーガスト・ウイットフオーゲル Karl August Wittfogel

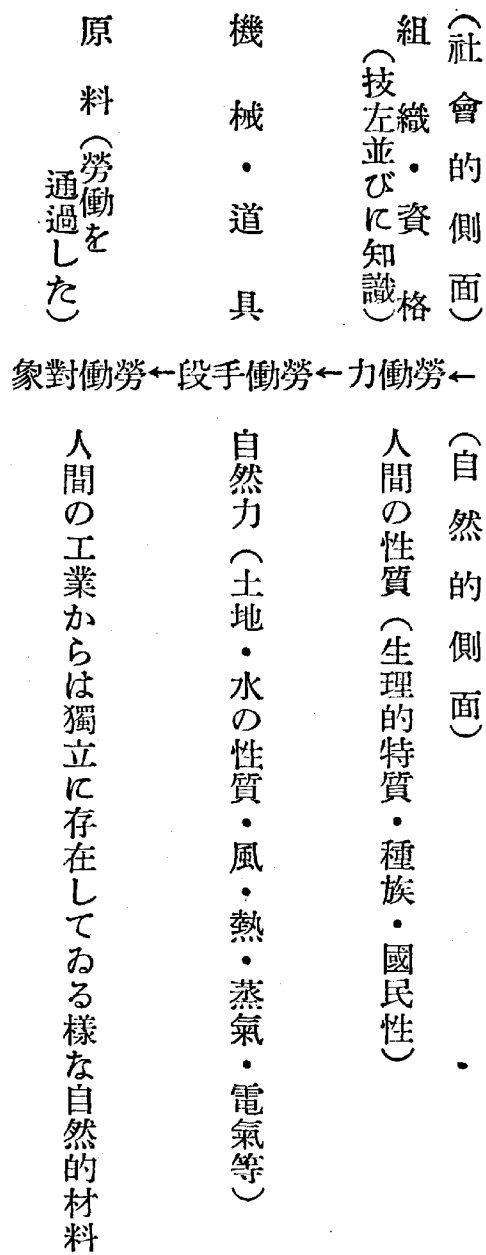
等の出現する事によつて、漸く從來の半身不隨的段階を脱出して眞實の、又社會科學としての經濟地理學確立の機運が動いて來たものと思はれる。かくして茲に一百年の間を措いて、經濟地理學が一般地理學、人文地理學、經濟學の領域から解放され、今や正に經濟地理學の對象、任務、方法を確立してその研究に確乎たる基礎が與へられんとしてゐる』(二四頁)と述べ、從來の經濟地理學に缺如して居た經濟學的方面の知識を注入することによつて、斯學に新生命を與えんとするものである。

扱て、然らば經濟地理學が一つの獨立科學として成立するために、その研究對象を何處に求め、その任務を如何に規定すべきか。彼は、此處に於いてもデイトリツヒの經濟地理學の定義(前出、一七三頁参照)を引用し、『經濟空間と現經濟人』とが斯學の二つの對象であり、『自然と人間との間に於ける交互作用が如何なる程度に、又如何なる方法に於いて行はれて居るかを究むる』事がその任務であるとす。斯くの如く、氏は『この交互作用が最近に於ける經濟地理學の骨子となつてゐる』と述べる事によつて、所謂『地人相關論』を奉ずるものである。

それ故に彼は斯學の任務を論ずる章に於いて『ドイツに於ける經濟地理學の最近の傾向を代表するブルユノ・デイトリツヒ』の發展せる地人相關論(一五一—一五三頁参照)を詳述したる後、『環境(原始、文化)、現經濟人及びこの兩者の交互作用と言ふ經濟地理學に於ける三要素』が勞働過程に對して如何なる關係に立つかを明かならしむるために Cunow, K. Marx, Wittfogel の經濟理論を援用して『生産力』『生産關係』『生産條件』

『労働過程』等の意義を定めた。ウィットフォードは、自然は労働過程を媒介として始めて人間の社會生活に作用するものであつて、此の過程に參與する根本的な三契機は労働力・労働對象並びに労働手段であるとなす。此の三契機は社會の發展が或る段階にまで達する時には次の如き自然的並びに社會的側面を有する。

社會的側面の展開後に於ける労働過程の三基本契機



此の様に論を進める事に依つて、經濟地理學の三要素が労働過程に於ける三契機に還元せられ『(一)環境は労働手段であり、(二)現經濟人は労働力として見られ、(三)兩者に於ける交互作用は労働對象の表現と見ることが出来る』と考へる著者は『かくて労働過程(生産の型)の三契機と經濟地理學の三要素とは同一のものを互ひに他の反面より眺めたるに過ぎないものである。』(八三頁)と主張する。

故に經濟地理學的研究をなすに當つて、氏は、先づ第一に交互作用の兩邊たる勞働手段としての環境と勞働力としての現經濟人との考察をなし、次に勞働對象の表現としての兩者の交互作用を検討する。斯くて氏にあつては、一般經濟地理學は經濟空間と現經濟人との交互作用を論ずるものであつて、『その方法論の特殊性は經濟地理學の視野に横はつてゐる他の多くの科學から得られる材料を補助科學として利用しつゝこれを地理的見地から整理し、且つ創出するものである。』(一〇九頁)

斯様にして遂に、『從來經濟地理學の領域に取入れられてゐた原始環象以外に、新たに文化(社會)環象を設定して、經濟地理學的取扱ひをなすことは研究未熟の私(川西氏)には堪え難いことである』(一一〇頁)と謙遜しつゝも尙ほ、彼は次の如き『論理的體系』に到達して居る。

第二編 原始環象と現經濟人との交互作用

第一章 總 說

第二章 勞働手段としての原始環象

第一節 氣 候 第四節 地 質

第二節 地 表 面 第五節 動 植 物

第三節 水 第六節 礦 物

第三章 勞働力としての現經濟人

第一節 協同の原始的形態としての種族共產體

第二節 後展の原動力としての人口

第三節 イデオロギイの起原及び發展

第四節 勞働組織

第四章 交互作用の形態としての労働對象

第一節 蒐集經濟(植物・動物・礦物) 第二節 栽植經濟(農業・牧畜業)

第三編 文化環象と現經濟人との交互作用

第一章 總 說

第二章 労働手段としての文化環象

第一節 器具より機械及び動力の發明 第二節 交通機關の發展 第三節 資本(商工業資本、金融資本)

第三章 労働力としての現經濟人

第一節 人口の増加及び變化 第三節、イデオロギイの變轉

第二節 技術の發展 第四節 經濟組織の變化

第四章 交互作用の形態としての労働對象

第一節 農 業

第二節 近代的鑛業

第三節 工業(造船・製紙・機械工業・纖維工業・化學工業・雜工業)

第四節 商業(封建的商業・國內商業・國際商業)

第五節 金融資本型としての産業の國內的獨占

第六節 資本輸出

第七節 經濟領域の分割

第八節 植民地の爭奪

第九節 重工業及び重工業地の爭奪

第十節 戰 争

四、右に就いての所感

前掲の如く川西氏の經濟地理學の體系は極めて豊富にして他にその類例を見ない様な内容を有し、理論經濟

學や經濟史の知識などがその中に多分に織り込まれて居るのを見る。原始環象を取扱ふ第二編に於いては、その第一節から第三節までは殆んど全部 Bogdanoff, A Short Course of Economic Science. 1922 に據る説明であるが、それ以外の節は在來の經濟地理學的著作就中 J. R. Smith, R. N. R. Brown, Huntington and Williams, Chisholm, Dietrich, Gregory-Keller-Bishop, Rutter. 左海猪平、大鹽龜雄等のそれに依據して居る。併し乍ら『從來經濟地理學の領域に取入られてゐた原始環象以外に、新たに文化環象を設定して經濟地理學的取扱ひをなす』(一一〇頁)所の第三編に到ると、Brown, Smith, Huntington 等の地理學者の説く所に耳を傾ける事極めて尠く、全卷六六四頁中の過半三五八頁の内容をなすものは經濟學者とも稱すべき Hilferding, Bucharin, Kautsky, Pavlovitch, Lenin, H. Levy, Joidels, Rubinstein. 石濱知行、小島精一、Knowles 等の所説である。是等の人々の所説に聽く事によつて、吾が經濟地理學の研究が裨益せられるところ大なるを認むるに吝ならざる者にとつても、猶ほ斯くも多數の頁をそれがために割愛して居る——その中には經濟地理學固有の研究課題と稱するを得ない様なものも多分に包含せられて居る——事の不當なることを感ずるのはひが眼であらうか。

斯様に廣汎なる内容を包含するに至つたのは、著者がその主張に従つて『經濟地理學の視野に横はつて居る他の多くの科學から得られる材料を補助科學として利用しつゝ、これを地理的見地から整理し、且つ創出』(一九頁)した結果に外ならないものである。従つて、讀者は本書から極めて多種多様な知識を得る事が出来るであらう。だか、然し、吾々は此の點に就いて或る制限を加えなければならぬ。淡川康一氏が『經濟地理

『通論』に於いて次の如く述べて居るのは味はふ可き言である。『經濟現象の中、地域と相互關係を有するものゝみが、經濟地理學の對象であつて、それ以外に脱出する事は、經濟地理學の經濟學に對する領域侵入であつて、嚴密な學問の意義からは許されぬことである。ブリューン教授も、ラツツェルの政治地理學が地理學の領域を脱して政治學の領域に進出した事を遺憾として、幾度も地理學の範圍を嚴守すべき事を説いて居るが、經濟地理學に於いてもこれと同一である。』(五一頁)然り、『經濟現象の地理的編制』を嚮導概念となす吾々は、その研究の歩を進めるに際して、飽く迄もその足を地球上に着けて置かなければならない。勿論、歩行する時一瞬間何れかの足が空中に在るが、それは前進のための必須なる一階梯である。従つて、經濟地理學の研究を進めるに際して、その補助科學又は限界科學に就いての關説も、歩行中何れかの足が地表を離れると同様の程度に於いてなされるのが最も適切なる措置ではなからうか。

以上は川西氏の『論理的體系』をば正しきものと假定した上での所論であるが、次に私は最も根本的な問題に就いて疑問を投げかける。

前述の如く、氏はデイトリツヒの謂ふ所の經濟地理學の三要素(自然、經濟人、兩者間の交互作用)を、ウイットフォードの謂ふ所の労働過程の三契機(労働手段、労働力、労働對象)に還元し、兩者は同一のもので互ひに他の反面から眺めたに過ぎないと言ふが、果してさうであらうか。此の還元は無理はなからうか。是は川西氏の論理的體系にとつて死活的な大問題たるを失はない。

川西氏の思案の途には、私の見る所によると、デイトリツヒが屢々出現して絶えず影の様に付き纏つて居る様である。併し氏は何處までもデイトリツヒに追隨して居る譯ではない。デイトリツヒは

1. die natürliche Grundlage, (自然的基礎)

2. der wirtschaftende Mensch, (經濟人)

3. der Wechselwirkung zwischen beiden. (兩者間の交互作用)

なる三要素は現實に於いては相互に結合して居るから『環境論』に於いてはそれらを一緒に纏めて研究し、尙ほその他に『地帶論』に於いて經濟人の・生産商業及び消費てふ經濟活動の・分布を研究して居る。然るに、川西氏はデイトリツヒの『環境論』の三要素を明白に獨立させ、それ等をウイットフォーゲルの勞働過程の三契機に還元させて、

(1) 自然的基礎 || 勞働手段 (自然力、機械・道具)

(2) 經濟 人 || 勞働力 (人間の性質、技巧並に知識)

(3) 兩者間の交互作用 || 勞働對象 (動植礦物、加工された原料) の表現

となし、原始環象と文化環象との關係に於いて各々此の三項目に就いて論述する事を以つて斯學の任務となして居る。扱て、此の場合、(1)及(2)の環元を認めても、(3)の環元を私の頭腦は認めて呉れない。例へば『勞働對象』たる礦物は『自然的基礎』であり、それと『經濟人』との間に『交互作用』が成立するが故に、此の關係

に於いては交互作用＝労働対象とする事が出来ないのは明かであるが、川西氏はそんな事を言つて居るのではなく、(3)の場合には『労働対象の表現』と言ふ言葉を用ひ、それによつて『農業』『商業』『工業』等々を意味させて居るのである。然し『工業』等々を労働対象の表現なりと見る事は正しくない。『工業』等々は經濟的活動の現はれたる形態である。そこでは單に『労働対象』のみならず『労働手段』も『労働力』も總動員せられて相互に作用し合つて居る。故に『工業』をもつて獨り『労働対象』のみの表現なりと見る事を得ず、氏の術語の中から適當なるものを選択するならば、寧ろ『交互作用の形態』と稱する方が良いであらう。併し『交互作用の形態としての労働対象』と言ふ時には依然としてそこに矛盾が包含せられて居るものと言はなければならぬであらう。事實、デイトリツヒに於いても『工業』等は『地帯論』の中に於いて論述せられて居り、而して又農礦商工業等に就いて地理的研究をなす事は必要な課題なのであるから、川西氏がそれらの事項を研究せられる事に對して異議をさしはさむ者ではないが、併し、その『論理的體系』構成の支柱に不適當なものである様に私には思はれる。即ち、デイトリツヒとウイツトフォーゲルとの融合乃至綜合には不自然なるもの、不合理なるものが存在して居ると思ふ。

序でに、氣附いた點を述べると、同書四〇―四一頁には特に引用符を附した次の一句がある。

デイトリツヒの解明する所に依れば『自然的事象とは人間に對しては既に所與のものである。いはゞ空間である。この空間の中に於いて人間の分布と人間の生存と融着とが行はれて居る。これは二個の異なる

本質ではなく、又二つの分離化された存在形式ではなく、一つの結合された合體である。この對立的な結合と影響とは對立的な力の結果であつて、これが交互作用に於いて互に影響し合つて變化を及ぼし合ふのである』と。

是をその原文と對照する時、前者は必ずしも引用符に値する程正確な譯文であるとは言ひかねる様に考へられる。(一五二頁に拙譯がある。)引用符を附する場合には最う少し責任ある譯文を出していただけたら讀者として便益を感じるの度が倍加せられるであらう。原文は次の如くである。

Die physischen Züge der Erde sind für den Mensch etwas Gegebenes, ohne sein Zutun Entstandenes. Sie sind gewissermassen der Raum, in den der Mensch hineingesetzt ist. Der Mensch bewohnt, belebt, bevölkert diesen Raum, haftet an ihm. Es sind nicht zwei verschiedene Wesen, die Natur (das ursprüngliche Milieu, die Urlandschaft) und der Mensch. Sie sind nicht zwei isolirte Daseinsformen nebeneinander, sondern sie sind manchmal nur locker, manchmal aber mit tausend Fäden aneinander gebunden.

Die Art der gegenseitigen Bindung und Beeinflussung ist eine Folge der gegenseitigen Kraft. In ihrer Wechselwirkung beeinflussen sich beide, wandeln sich beide. (Dietrich, Grundzüge d. allg. Wirtschaftsgeographie. S. 30)

又、同書三二二—三二四頁を見よ。そこに吾々は次の文字を読む。(傍點は私)

從つてレーニンのいつたやうに『大戰前の世界の政治的實在は決して國民的諸國家ではなくて數群の國民的諸國家である。その各群は或る産業的大強國に依つて支配され、且つ多かれ少かれ數個の小國家又は

植民地を包含してゐる。これ等の或るものは法律上では獨立してゐるかも知れないが、凡べて等しく事實上即ち經濟的にはより有力なる強國に従屬して居た。即ち過去二十五年間國內の大産業の内部で盛んに行はれたトラスト化の傾向が今日では諸國民のより廣い世界に於いても見られるやうになつたのである。

川西氏によると、この引用符の中に在るものはレーニンの言であるのであるが、併し私の淺學は彼の本の中に斯かる句を見出すに至つて居ない。而して引用符あるに拘らずその頁數を附記してないがためにそれを檢索するの術を失ふ。偶然にも私はこれに類似の句がホラピンの本の中にある事を知つて居た。但し、其處では『大戰前の世界の…』代りに『戦後の世界の…』となつて居り、『強國に従屬して居た』の代りに『強國に従屬して居る』となつて居る。戦前の世界と戦後の世界とではその間に甚大なる相違がある。J. F. Horrabin, An Outline of Economic Geography. P. 69 には “The political realities of the post-war world are not nation-states at all; but groups of nation-states, each dominated by some great industrial power, and each including a greater or lesser number of smaller states or colonies, some probably with de jure independence, but all alike economically (i. e., de facto) dependent on the stronger power.” とある。その獨逸譯では “Die politischen Realitäten Nachkriegswelt, “aber alle in gleicher Weise wirtschaftlich von der stärkeren Macht abhängig sind.” (S. 105) とある。ところが、それを日本語に譯した本〔菊川忠雄譯『經濟地理概論』(改造文庫)一〇二頁。及び同一譯者による同人社版の八一頁〕の中は、如何した事か『大戰前…』となつて居るが、もう一つの方は正しく『強國に従屬して居る』と譯出せられて居る。而して尙ほ譯者は親切にも〔註〕としてレ

トニンの『帝國主義論』からそれと類似の引用をして居る。茲に至つて、事態は略々明白となつた様に思はれる。即ち川西氏は菊川氏の譯本から引用するに際して不注意にもホラビンの言をレーニンの言と早合點し、且つその誤譯又は誤植を其の儘用ひたのではなからうか。

上述の如き・私にとつては明かに川西氏の誤謬であると考へられる様な點を若干有するにも拘らず、私は此の劃期的勞作に對して大なる尊敬と賞讃の言葉をおくるものである。蓋し、『囚はれたる經濟地理學』をば放たんとするが如き・『未墾の原野に鋏を下』さんとするが如き・『新興一社會科學としての經濟地理學の基礎付けへの一つの試み』を敢行せんとする時には、著者自身の謙遜にも自認するが如く『書き終つて見るとその論理的體系に於いて、又その諸要素間の聯關的論述に於いて意に滿たない個所が多々ある』のは自然の事であるから。私は敢えて此の一大快著の必讀を御すゝめする。

著者は、本書の外に『理論經濟學の若干問題』『工業經濟學概要』の著書及びシュミット『世界經濟史概論』及びノールス『産業革命史論』の翻譯ありとまき。而して、拓大、巢鴨高商、桐生高工に教鞭をとるもの如くである。

五、黒正氏の所説の紹介

次に、經濟史學者として令名高き京大教授經濟學博士黒正巖氏の近著に移る。これは『日本經濟地理學』の

第一分冊であり、『今後、日本の工業・原始産業・商業交通・人口聚落等に關して具體的研究を試み、冊を分ちて順次公刊する豫定』であり、此の第一分冊はその基礎をなしその出發點となるものである。従つて、その名は『日本經濟地理學』であるが、本冊に於いては最終の第五章『我國國民經濟地理的編制の特徴』に就いて一五頁ばかりの研究があるのみで、その他は全部經濟地理學の新しい基礎付への試みに充てられて居る。

『今日の日本人が外國の事情につきては可なり廣汎且つ正確なる知識を有するに拘はらず、祖國日本に就きては餘りにも無知、無理解である事を痛歎して止まぬ』著者は、何人も知るが如く日本經濟史研究の大家であるが、今又日本經濟地理學の研究に手を染められたものである。

斯くの如き經濟史家の經濟地理學界への進出は誠に合理的なことであると言はなければならぬ。蓋し『一定の社會に於ける經濟的文化の本質を理解せんとすれば、經濟現象の歴史的發展過程並にその地理的分布過程を研究するの必要あり、』經濟史と經濟地理學とは『右の如き固有のアプリオリを有するが故に、同じく經濟現象を取扱ふものであり乍ら、獨自の存在を有し、同時に又密接不離の關係に立つものである』からである。

而して黒正教授は、大正九年大學院に入つて以來經濟史と經濟地理學の研究に従事し、在外研究中には『工業立地論』Über den Standort der Industrien の著者 Alfred Weber の講筵に侍して得る所少からず、歸朝後は必ずウェーバーの方法によつて一定の國民經濟の地理的編制の研究を實行せんことを心ひそかに期して居つたのであるから、今吾々が教授の經濟地理學研究の一端——しかし乍ら最も根本的な基礎付けの研究を手にしても別に不

思議ではないのである。

此の『第一分冊』は『第一編 總論』の題下に、

第一章 經濟地理學の概念

第二章 經濟地理學の研究課題

第三章 經濟地域設定法

第四章 經濟地理學の研究法

第五章 我國民經濟の地理的編制の特徴

の五章が取扱はれて居る。

教授は、先づ『人類の歴史は自然に對する鬭争 (Kampf um die Natur) の歴史である』(一頁)と冒頭して、人文地理學・經濟地理學の歴史を通觀したる後、『人文地理學並びに經濟地理學が地誌的學問の域を脱し、更に素朴的地人相關論より飛躍して、文化又は經濟の空間性又は地理的分布性の研究をなすに至つて、始めて完全なる獨立科學となるものと思ふ。蓋し同じく文化を研究對象とする歴史學が次第に發展して科學的獨立を見るや、即ち文化の時間性又は時間的發展性を研究するに至つたのと相適應すべきものと考へられるからである』(一五頁)と述べて居る。

従つて、教授は『經濟地理學は經濟的文化を、その空間的分布現象に於て研究する科學である』(一七頁)と定義する事によつて在來の經濟地理學との異別性を示して居る。即ち、教授の主張する所によると、『經濟

地理學と題名する諸書を見るに大體二の傾向を有する。一は英米流の經濟地理學にして相來の商業地理學の變形と見るべきものである。他の一つは獨逸流の經濟地理學にして自然と經濟との相關々係又は交替作用の研究を中心とするものである。併し乍ら之等は已に述べたるが如く、經濟地理學的認識の確立に缺くる所があると思ふ。單に商業上又は營利活動としての經濟活動上の一般知識の集録であるか、又は自然の經濟的説明にすぎない。固よりかくの如き研究も經濟地理學にとつて重要な意義を有するけれども、之は或は便宜上の事柄であり、或は又經濟地理學の一研究方法たるに止り、前提條件の一つであつて、經濟地理學そのものではあり得ない。ドイツクスの *Geökonomie* の如きも、自然と經濟との相關論の域を完全に脱却したものではない。學としての經濟地理學は經濟現象の空間的分布といへる概念を先驗的指導原理とすべきものである。即ち經濟地理學は、經濟的文化が如何なる空間的現象形態を以つて顯現するか、従つて各地域が如何なる經濟的分布状態を呈するか、更に又その分布状態が如何なる要因によつて形成せらるゝか、その地域の經濟的編制 (*geographische Gliederung*) の合理性如何を研究する。換言すれば、經濟的文化の空間的面的研究によつて、經濟的文化の本質を闡明せんとするものである。』(一六一—一七頁)

今、しばらく教授が斯學に與えた定義の分析的説明に耳を傾ける。(一八頁—三三頁)

『第一 經濟地理學は經濟的文化の現象形態を研究するものである。』 經濟的文化とは人類の經濟的欲望充足のために完成せられたる價値物の總和を意味する抽象的概念である。此の抽象的概念は種々の形態をとつて顯

現する時にのみ之を認識し得るが故に、經濟的文化を研究すると言ふも、實はその現象形態に就いて研究するものである。而して經濟的文化も、一般的文化と同じく、時間的面と空間的面とを有し、前者の研究は經濟史、後者の研究は經濟地理學となる。

『第二 經濟地理學は經濟的文化を地理的分布現象に於いて研究するものである。』第一に於て述べた様に、經濟史は經濟的文化現象の時間的垂直的發展過程を、經濟地理學はその空間的平面的分布過程を研究するものであるから、一地域の經濟現象を個別的に記述し、或は各地方の産物たる貨物の數量や資質を研究するものは、經濟誌 (Wirtschaftskunde) 又は商品學 (Warenkunde) にして、經濟地理學そのものではない。而して、斯學の嚮導概念たる『地理的分布性』は一定の制約を有し、それは經濟的文化價值と關係せしめられてゐなければならぬ。

『第三 經濟地理學は經濟地理學は經濟的文化を研究する科學である。』

イ 經濟地理學は文化科學である。

ロ 經濟地理學は個別化的通則發見的科學である。

ハ 經濟地理學の法則は傾向法則又は類型法則である。』

一般に經驗科學は自然科學と文化科學とに大別せられ、前者は沒價值的普遍化方法を後者は價值關係的個別化方法を用ふる。然るに、經濟地理學は文化現象の一たる經濟現象をその研究對象となすが故に、個性を離れ、

價值關係を離れる事が出來ず、各地域の經濟的個性が最大關心事をなして居る。故に、若し地表の各部分が何等經濟的に特異性を有せざる場合には斯學はその存在の理由を失ふに至る。而して斯學は地表の各部の經濟的個性の高調記述をなすと同時に又各地域に共通なる關係よりして一定地域に於て一定の經濟的分布の形成せらるる一種の法則を定立する事をも旨とすべきである。併し乍ら、文化科學に於ける法則は、自然科學のそれとは異り、只事象の傾向を法則化し又は諸々の個性を統一して類型化したものに過ぎないのであるから、經濟地理學の法則も亦單に類型法則又は傾向法則にすぎない。而て、一般に、經濟地理學は經濟史と共に歸納法を主として用ふべきである。されど又經濟現象に固有なる特性から演繹して經濟現象の史的發展又は地理的分布の理法を究明する場合も少くない。

斯様にして經濟地理學の概念は明かにせられたが、然らば『經濟地理學は地理學なりや經濟學なりや。』之に對する教授の見解は次の如くである。『一説によれば、經濟地理學は經濟學と地理學との中間領域に在りとせられる。併し乍ら、今日の如く科學分類の嚴正を期する時代に於て、かゝる折衷の見解は排斥せらる可きであつて、それは恰も經濟地理學が自然と經濟學との相關論であるとするの見解が正當でなく、又二元論的に人文地理學を見るのが不都合であるのと同である。經濟地理學は其研究對象が一般經濟學のそれと同じであるが、その研究方法よりすれば人文地理學に屬せしむべきである。併し乍ら、經濟學の體系並びにその分類に於て特殊なる立場をとる場合に於ては、經濟地理學を經濟學の一分野とする事が絶対に不可能であると論斷は出

來ぬ。』(三三三頁、註一)

前述せる所によつて明かなるが如く、經濟地理學は、經濟的文化が如何なる現象形態をとつて空間的に顯現するか、従つて又如何にして地表の各部分が一定の經濟的個性を有する經濟地域を形成するやを研究し、各地域の比較研究をなす事を任務とするものである。之によつて經濟地理學は自らその研究課題が規定せられる。

故に『一定の地域の經濟的個性又は一定の地域の經濟現象の地理的分布なるもの』(三八頁)が斯學固有の研究課題と言ふべきである。乍併、それらのものは、經濟現象の内在的本質によつて決定せられるのみならず、更に『經濟以外の諸關係』の影響をうけその基礎の上に立つものなるが故に、『之等の諸關係を全然無視して經濟地理學の研究は成立し得ない。』(三九頁)されど、之等の諸關係を固有の課題と等置することは斯學の意義を失はしむるものであり、又之等を單に機械的に無數に列擧する事は全く意味をなさない事であるから、斯學の固有の研究課題と補完的課題とを區別しなければならぬ。『前者に屬するものは、經濟現象に内在する本質、並にその機構、換言すれば經濟組織及び經濟的給付編制である。後者に屬するものは之を大別して社會的關係と自然的關係となすべく、更にこの兩者は種々の項目に分つ事が出来る。』(三九頁)

『經濟地理學固有の研究課題』とは何か？ 經濟地理學は『一定の經濟地域に於ける經濟的給付の地理的編制 (Geographische Wirtschaftsleistungsgliederung) を研究の主眼とするものである。その他は之が目的到達の手段といふも敢えて差支へはない。』(四二頁)而して如何なる經濟的指導原理 (封建主義、資本主義、社會主義等) によ

つて各地の經濟が指導せられて居るかは經濟現象の地理的分布に根本的影響を與へるものであるから、之は結局最も重要な研究課題の一といはねばならぬ。斯くて固有の課題として『第一、經濟に於ける指導原理』、『第二、經濟組織——經濟的給付の編制』を得る。

次に『經濟地理學の補完的研究課題』としては左の事項が研究せらるべきである。

『社會的諸關係』

- 第一 政治組織
- 第二 專有關係
- 第三 人口關係
- 第四 精神的文化の發達狀態
- 第五 民族性——人情氣質

『自然的諸關係』

- 第一 氣候(人間の資質との關係、人口との關係)
- 第二 土地(地勢、地質、地域、地位)

以上によつて、私は、黒正教授の經濟地理學の新しき基礎付に就いての輪廓を描寫し了えた。

六、右に就ての所感

黒正教授の近著は僅々百五〇頁の小冊子に過ぎないが、その中には幾多の價值多き文字・示唆に富む主張を見出すことが出来るのである。私は、本量の出現によつて、最近思索しつゝあつた諸々の事項に就いて種々の有益なる解決と暗示と確信とを與へられた事を喜ぶと共に、それを感謝するものである。

『一定地域の經濟的文化の地理的分布狀態』を『統一的に理解するためには常に經濟史的研究を必要とする。余（黒正巖氏）が經濟史と經濟地理學とを併せ學ばんとする所以は實に茲に存する』（一二五頁）と考へられてゐる教授が既に幾多の經濟史的研究を發表せられて居る事は周知の事であるが、此の教授が經濟地理學を基礎付けんと試みるに際して經濟史との關聯に於いて思索して居る事は讀者の容易に首肯し得る所であり、是が極めて良く功を奏して居る様に思はれる。

されど、本書は『ノート筆記を簡にする爲めに書かれたものである』（序四頁）から、新しき主張・特異なる主張に就いてヨリ一層の説明の欲しい所も少くないが、それらの點を著作を通して聽き得ないのを遺憾とする。今、そのたゞ一の例をあげるに止める。本書の一六一—一七頁に於いて、經濟地理學には二の傾向があつて、一は英米流の實用的な從來の商業地理學の變形に過ぎざるものであり、他は獨逸流の地人相關論であるが、之等は經濟地理學的認識の確立に缺くる所があり、單なる經濟活動の一般的知識の集録や自然の經濟的説明は斯學の前提條件の一であつて斯學そのものではないと述べたる後（前出、一六九頁參照）、『學としての經濟地理學は經濟現象の空間的分布といへる概念を先驗的指導原理とすべきものである』と積極的に新しき主張をなすに際して、何故に從來の斯學の嚮導概念を否定して自己の提唱する『經濟現象の空間的分布』と言ふ新概念を採らざる可からざるかに就いての必然的理由を示さなければならぬのではなからうか。敢て、その明白なる説明を要求したい。

教授は、『經濟的文化も、一般的文化と同じく、時間的面と空間的面とを有し、その時間的面を研究するものは經濟史にして、空間的面の研究をなすものが經濟地理學である』（一九頁）と言ふ風に經濟史の方面からの推理によつて斯く論斷せられて居るが、併しラツツェル以來長い間守られて來た『地人相關論』から一大飛躍を行はんがためには更に別の方面からの説明があつて然る可きであらう。私の拙くも考へる所によると、自然は直接に人間に作用するものでなく、又反對に人間は直接に自然に働きかけるものでもなく、一定の『經濟的關係』を通して交互作用を行ふものである。自然は此の『中間項』に媒介せられて始めて經濟の態様やその發展の上に影響を及ぼすものであり、vice versa である。而して、此の『中間項』の變ると共にその交互作用も變化せざるを得ない。故に、此の一定の『經濟的關係』が前面に現はれ、それが重要性を帯びて來る。同じく此の一定の經濟的關係を對象として科學的研究を行ふも、その用ふる所の方法の異なるに伴れて、或は理論經濟學となり、或は經濟史となり、或は經濟地理學となる。而て、此の場合、かゝる關係の下に於ける經濟現象をば、『時間的發展性』を嚮導概念として歴史的に研究する時『經濟史學』が生れ、之に對應して『空間的分布性』に於いて地理的に研究する時『經濟地理學』が生れ、それ等が獨立の科學としての存在の理由を持つ事となるのである。斯く觀する事によつて、斯學は歴史的なる文化科學（又は社會科學）たるの性質を具備し來り、且つ斯學が『自然的關係』を問題とする以上、又『社會的關係』をも問題とせざるを得ない事となる。併し乍ら、是等の諸關係を『經濟現象の地理的編制』なる本格的根本問題に照して見る時、是等は從たる關係に立つ

ものなる事が明かとなるであらうから、是等の諸關係は前階的問題として即ち黑正氏の所謂『補完的問題』として取扱はる可きであつて、此際、是等の關係のみを論じたり、是等を本格的問題と同等に待遇したりするのは失當であらう。

次に、『文化科學として存在し得るが爲めには、あく迄、個性又は價值關係が根本的基礎をなすべきである』(二七一—二八頁)と言ふ風に『價值關係』と言ふ言葉を常に使用して居る教授が二六頁に於いて『文化科學の存立の根本理由は、その個性の價值[○]的認識である』と言はれて居るが、何故に此處で價值關係的認識とせず『價值[○]的認識』と言ふ言葉を使用せられたのであるか？ 此の點に於ける説明は、勿論、ドイツ西南學派の哲學の祖述であるが、ビンデルバンドの説くが如く、『經驗的歴史科學は、生成變化の見渡すべからざる多様の中から、價值に關係する事によつて關心をそゝり得る如きものを摘出し、以て個々の要素を價值關係的全體構造として完成する事によつて其處に自らの對象を造り出すのである。然し乍ら——悲しくも事實の示す如く其處には幾多の誤解があり、之をさける爲に絶えず繰返し注意されねばならぬ譯であるが、——かゝる價值關係は決して價值判斷ではなく、又道德化的評價は文化研究其ものに遠ざかつて居る事猶自然研究に遠ざかつて居ると同然である。』(Windelband, Einleitung in die Philosophie, S. 335. 清水清譯 ^{ウインデル} ^{バンド} 『哲學概論』四四〇—四〇一頁)而て『此の如き價值を詮索研究すること、これこそは倫理學の課題である』(Ibid., S. 336. 譯本四四二頁)のである。依つて、問題の點は、『價值關係[○]的認識』と明記すべく、さうする事によつてつまらぬ誤解を

防止し得るであらう。何となれば『價值的認識』と讀む時には『價値判斷』とも受取り得るのであるから。教授は斯かる意味に於いて即ち價値判斷と言ふ意味に於いて『價值的認識』なる言葉を使用する筈はないであらうから、これは何等かの不注意（誤記・誤植・脱漏）に起因するものと考ふべきであらう。

七、結 言

以上によつて、私は、『寥々東西殆んどその類例を見ないところ』の『社會科學（從來は自然科學の一領域に過ぎなかつたが）の一としての經濟地理學』（川西氏前掲書三頁）の新しき基礎付への試圖として、川西・黒正兩氏の所説を不完全ながらも出來得る限り忠實に紹介し、併せてそれに對する私の拙き讀後感を述べ了えた。その紹介に於いて、又その讀後感に於いて、原著者の眞意を傷ける様な點があるかも知れない（私自身としては斯る事なしと信ずるものである）が、併し乍ら若しそれあるとしてもそれは先輩諸學者に對する不敏なる末輩の敬意の表現に外ならないのであるから、それに對しては更に懇篤なる御示教を仰ぎ度いと希ふ。

前述せる所（三、四、五、六に於いて）によつて明かなるが如く、右に紹介せる兩書は極めて示唆に富み、且つ有益なる新文字に充された價値高き近業なるが故に、私はこれを現在の我が經濟地理學界から一般讀書に贈る事を甚だ愉快に思ふものである。敢て一讀三省を望む。

黒正博士は『純然たる經濟學徒』（序四頁）であり、川西氏もその既往の著書や行論の風から推察すると經

經濟學者の範疇に入る可き人である様に思はれる。斯様に經濟學者が經濟地理學界に進出して來た事は、注目に値する事であり、且つ私の年來の主張を裏書するものとして歓迎すべき事である。從來、我國の所謂『經濟地理學』なるものは、地理學者の片手間の仕事に過ぎず、従つてそれは地人相關論たる人文地理學の域を脱せざるか、或は又單純に商品に就いて若干經濟的な臭を持たせた説明を羅列するに過ぎなかつた。それは決して經濟地理學ではない。經濟地理學と經緯の關係にある經濟史學は從來専ら經濟學者によつて研究せられ、又動物地理學・植物地理學は専ら動植物學者の手に委ねられて來て居るのに、獨りわが經濟地理學のみは地理學者の副業たるかの觀を呈して來たのは全く偶然の事であるが、此事は斯學の前進を停滯せしめ・阻害せしむる一因をなして居たと言はなければならない。斯く論じ來る時、斯學の發達をはからんが爲には、斯學の研究を吾々經濟學徒の手に奪ひ取らなければならない事が明かになるであらう。而て、經濟學者にして其他の諸科學特に地理學に造詣深き人によつて研究せらるべきである。地理學者の良し加減な經濟的常識を以て經濟地理學の大成が望めないと同様に、又地理學の素養なき經濟學者の斯學界への進出は危險であるから、經濟地理學を研究せんとする經濟學者は地理學的研究を積む必要がある。それと同時に、足を地上から離して空中に浮流しつゝ、抽象的經濟理論に餘りにも永い間陶醉する事のない様にしつかりとその足を地上に踏みしめつゝ、その研究の歩を進める様に警戒しなければならない。